



カンボジアの教育事情は、今 カンボジアの子どもの宝物

やぎさわ かつまさ
八木沢 克昌

社団法人シャンティ国際ボランティア会(SVA)カンボジア事務所長兼常務理事

前任国のラオスに3年駐在、その後、昨年2月からカンボジアに異動して1年4ヶ月が経過しました。ラオスの前にタイに三回、17年駐在していたので、カンボジアは3カ国目の長期駐在国となりました。もともと28年前にタイ・カンボジア国境の難民キャンプでの活動がきっかけでこの活動に参加した私にとっては、原点のカンボジアにやっと赴任することが出来たこととなります。

私たちは、カンボジア国内では、NGOとして15年前から、学校建設、読書推進のための図書館活動・人材育成、印刷・出版活動、スラムでの教育支援、伝統文化の支援、農村での植林活動等を行っています。カンボジア国内に駐在している時には、地方の農村の辺境の村や学校の調査、学校建設の調印式、開校式等と頻りに訪れます。以下、今年の6月のある村での体験記です。

「スポー、スポー、スポー」という声を聞いて、村人や先生たちなど大人たちから歓声とどよめきがあがった。「スポー」とは、カンボジア語で、本の意味。カンボジアの中部、コンポントム州幹線道路から30分でたどり着く農村の小学校に通学する子どもたちに、今、一番欲しいものは何かという質問に対する子どもたちの回答だ。本と給食どっちが欲しいとの質問だった。さらに、コンポントムの街から山奥に四輪駆動の車で、3時間走りやっと辿り着いた村の小学校でも同じように本

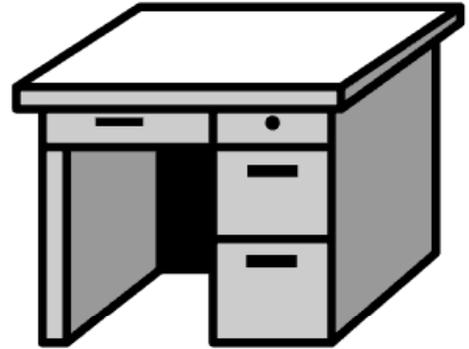
が一番欲しいという答えだった。場所は、コンポントム郡サンダン郡ベン村小学校。生徒数119名。先生は二人の複式学級。1年生から4年生までしかない。どう考えても、僻地の極貧の村であることが村人の家や自然環境から伝わってくる。

現在、カンボジアでは教育省が中心となって、ユニセフ等の支援の下にChild Friendly Schools(CFS)構想を推進している。全ての子どもたちが学校に通えるようにとの願いからだ。

現実には、農村の中でも幹線道路から離れた僻地となると小学校が2教室、先生も2人という小学校が多い。小学校といっても僻地の学校となると、教室には机と椅子と黒板があるだけで、教科書も子どもたちに一冊ずつはない。子どもたちは、黒板に先生が書いた文字をノートに写して暗記するのが一般的だ。ノートがない場合には、石版を利用している。

折角カンボジア語の文字の読書きを勉強しても、教科書も本も農村には存在していない。文字を読む楽しみを知らない。文字を通して、本を通して新しい知識、世界を知る機会が閉ざされている。僻地の農村の多くでは、小学2年生の途中で、ドロップアウトしてしまう。最低限の文字の読み書きと算数が出来る程度。

カンボジアの小学校は、1年から6年までだ。カンボジア全体で、小学校6年生を卒業できるのは、全体の43パーセントにすぎない。地域によっ



ては2割にも満たない。またカンボジア全体の小学校で、小学校に井戸とトイレがあるのは57パーセント。2007年1月のカンボジア教育省の最新の統計では、全国で、15,000教室が不足している。教師の数と質の不足の問題も深刻だ。

カンボジアの農村の子どもたちにとって、食べるものよりも本が一番欲しいという答えは、新鮮な驚きであった。カンボジアや他のアジアの国の農村における子どもの就学率の低さは、労働力として必要なこと、親の理解の不足、また、貧困が原因であるとされてきた。カンボジアの多くの農村の学校には、運動場がなく、体育の授業がない。また、音楽、芸術の授業もほとんどない。運動場となる土地があっても無計画に木を植えたり、花壇を作ったり、国旗掲揚塔を校庭のど真ん中に作ってしまう。学校の中に何をつくるという基準もマスタープランも存在していない。日本でいう「知育」「体育」「徳育」といった考えがない。

子どもたちが学校に来ない原因は、貧困と、子どもは労働力という考えがあることは否定できないが、学校が楽しい場所ではないことは明らかである。学ぶ喜び、夢や希望、新しい世界を知る喜び、感動がないことが、子どもにとって一番学校に行きたくない原因になっていると思われる。今から15年前、タイの小学生にとっても宝物は何かという統計があった。何と、一番は教科書だった。また、バンコクのスラムの火事の時、子どもたち

が一番最初に持ち出すのは、教科書とノート、文房具の入ったカバンだった。大人たちは、テレビ、冷蔵庫といった財産である。

アジアの農村の子どもたちは、国は変わっても勉強がしたい、本が読みたい、学校に行きたい、学びたいという気持ちが強い。本は宝物である。子どもの教育の大切さは、理解しているつもりだったが、カンボジアの僻地の子どもたちの「本が欲しい」という声と笑顔に新鮮な驚きと教育の原点を感じた。子どもたちは、自分で本を買うことも、持ってくることも出来ない。未来の希望であり、宝である子どもたちに本を届けるのは、私たち大人の責任だと痛感させられた。

また、クーデターにより政情の不安定化した隣国タイ。言論の自由のない一党独裁のラオス。カンボジアと似たような歴史的背景を持ち、国際社会と国内の協力により治安の回復と復興に努力するアフガニスタン。今年の5月末、これらの国々を訪問してみて、いかに言論の自由、人々の命が守られ、安心して暮らせるという「人権」「政治の安定」「民主主義」「汚職の撲滅」、そして、「平和」が大切であるかを痛感させられた。子どもの未来にとっては、「教育の機会」の大切さ、特に「平和」は、すべての基本だと思いつく毎日である。